島尾敏雄作品集

3

品文社

島尾敏雄作品集　第3巻

昭和三十七年四月二十日初　版
昭和五十一年七月二十日十三刷

著　者　島　尾　敏　雄
発行者　中　村　勝　哉

発行所　株式会社　晶　文　社
東京都千代田区外神田二―一―一二
振替口座東京六―六二七九九番
電話東京(二五五)四五〇一

印刷　株式会社堀内印刷所
製本　有限会社美行製本

© 1966 <検印廃止>　落丁乱丁本はお取替えいたします

目次

兆　一
朝影　二
亀甲の裂け目　三
大鋏　四
月暈　四
未明　五
死人の訪れ　六
断崖館　七
子之吉の舌　八
離島のあたり　一〇
春の日のかげり　一二
坂道の途上で　一六

鬼剝げ　一五〇
帰巣者の憂鬱　一五八
反　芻　一六八
む　か　で　二〇一
冬の宿り　二一八
川流れ　二三〇
肝の小さいままに　二三六
闘いへの怖れ　二四四
星くずの下で　二五四
川　に　て　二六九
家の外で　二八〇
廃　址　二八九
帰魂譚　三〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

兆

道路は乾燥し切り、砂ぼこりが厚い層になつて道の上に浮き、靴に吸いついた。

空の高い所では、風がうなり声をたて、あわれな金切声のように長く緒をひくのだが、たけり狂うそのエネルギーの正体をつかむことはむずかしいし、そのひようひようという吼え声をきくと妙に意気が沮喪した。

地上にも風は吹きまくつていた。然し地上を吹く風は大空の風のうなりのように吹きつ放しではなかつた。でたらめの方向から、でたらめの間を置いて吹いて来た。そして風が吹くと厚い層の砂ぼこりはもうもうと吹き上つた。耳も目も口も襟も胃もざらざらになつた。そのざらざらの砂ぼこりの道を人の流れがひきもきらずに続いていた。

巳一はその中に毛内（モウナイ）と沢（サワ）と一緒に肩を並べてまざつていた。

三人はともかくかつての学生仲間の関係にあつたが、そういう間柄にみられるいかにも親しそうな擬態は巳一をたまらなくした。然し毛内も沢もその擬態を重荷に思わずに十二分に利用し人にもおつかぶせることが度々であつたので、巳一はその二人を心の底で軽蔑していたかも知れないのだ。と言つても三人顔を合わせれば巳一は彼等とぞんざいな会話をした。二人とも世間ではうまくやつていたのでその中に具合よくとけ込んでおり、巳一の鳥肌立つたような世間恐怖症に比べると、どうしても腰の辺りがしつかりしている。巳一にしても毛内や沢なみに調子よく世間となれあいたいと思うが、二人とじかに顔を合わせると、とたんにうまくやり度くなくなり、二人の顔付きが馬鹿げて見え、ついでに自分の脂肪の少ないかさかさした容貌がうとましくなつて来る。毛内と沢の二人で会話が仲良くはずみ出すと、巳一にはそれが隠語め

いて聞こえ反射的に無口になつて行く。
ざらざらの砂ぼこりをかぶり白い道を歩いていると、隱語に似たそれらの言葉は二人の共謀の兇器となつて巳一の横顔にじつと押しつけて来るような妄想が起り、冴えない蒙古型の薄い眼が四つ巳一の意識にはりつく。その眼は無意識な眼だ。単にそこに向いて動かないというだけだが、巳一はそれにたじたじとなつた。その眼には羞らいがなくただ四つ並んでいるというだけで、巳一がその中に毛内も沢も自分を軽蔑していると読みとつたのは思い過ごしだ。然しそれだから一層冷酷な感じはあった。
毛内と沢が世間を背にしてがつちり立つている固さに向つては、こつちはふにやふにやだと二人に印象付けているのではないかと巳一は思うのだが、これは二人に対する巳一の負い目だ。
そうはいうものの、三人こうして一緒に集まつてみると、毛内と沢の結びつきが必ずしもうまくがつちり損益収支相償えているとも思えない。巳一がその気にさえなれば、二人のどちらかととつ組み二人の結合に水をさすことも出来そうだ。然し二人のそばによつてみると、ちんちくりんのくせに精力的な浅黒い顔の毛内や、沢の小太りで髭のそりあとの青い女好きのするたのもし気な顔ばかりがむんむんしていて彼と二人のそれぞれの間に深いさけ目が立つのを感ずる。
人々は相変らず歩いている。
そのうちに、その道を歩いている者は、一様に方向が同じであるらしいことが分つて来た。向つて行くその方にきつと何かきまりきつた動きのとれないことが待ち構えているかも分らないという不安も含んでいた。流れのしもの方に危険な瀑布がかかつていそうな気配に気がまいるのと同じだ。然し瀑布がしかとあるか無いかは分つていない。ただ流れ行くまに滝の瀬音でも聞こえやしまいかと、きき耳をたてているようなものに似ていた。
相も変らぬ天空の吼える声と地上の突風のまき立てる砂塵が、人々にぐちつぽい調子をくつつけた。それなのに太陽はおだやかに照りつけていた。風が強いのに光がおだやかだというのは少しちぐはぐな感じだが、事実太陽は音と風と埃を通して地上をじりじりとおだやかに照りつけていたのだ。身体は汗ばみ、汗ばんだ身体に砂ぼこりがまといついた。
すると風が人々の声を運んで来た。
〈我々は外国人に訓練して貰うために集合しつつあるのだ〉
又もや砂ぼこりが舞い上つた。
緒をひいた風のすすり泣きが天空にあつた。
たつた今決心しなければならないのだと巳一は思つた。然し彼の心には躊躇があり微妙にゆれたのだ。これはどういうことだ。

巳一は毛内と沢の顔付きが気になつた。どうせおんなじだろうと思つても、ひとりひとりの心をのぞいて手でしかとつかむことは出来ない。

動員！　という誘惑的なざわめきが地上を覆い始め、風はそれを吹き払つてはいるのだが、人々の心の中に植えつけられたさまざまの偏見をこそぎ落すことはむずかしい。それは人々の心の中にさまざまに屈折して行く。三人共に軍隊生活と戦場での体験があつたことは、陣頭で風に吹きなびく自分の絵姿が幻影となつて立ちがちであり、とどのつまりそこに陥ち込んでも絵姿の自分が再び立ち上つて来るのだという錯覚があつた。肉体の爽快さが、向うにあると無理にも思い込むことは気やすめになつた。然し現実は断ちきられはしないから、絵姿は生ぐさい体臭のからみ合うあのむつとした軍隊生活の残飯捨場にとつて代られ、そこにはこのちんちくりんの顔とかかつぷくのいい顔のようなものしか並びはしないし別のものがそこにあるのではない。

巳一は毛内にも沢にもその表情の中にどんな反応も認めることが出来なかつた。彼はそれで少し安心した。こずるい笑いの皺が口辺にただよつた。同じ穴の貉の臭さが感じられた。三人共にむかしから鋭さはなく、三人集まつてみると生ぬるさがはつきり露呈した。貉どうし首をよせ合つていることを感ずるのは気分がまいる。それで巳一は二人を一層軽蔑した。それならどうすればいいことなのか。

然し既に散開の号令がかかつていた。どこからともなく、その号令を風が砂塵を吹き上げ吹き上げ運んで来た。人々はその場に散つて土の上に腹這いになつた。

毛内も沢もにわかに敏捷になつた。巳一も腹這う姿勢をとつた。もう訓練は始まつているかも知れないと思つた。

何が起るか分らないが、みんながやる通りにしていれば、やがて分つて来るんだというあの体験からの智慧があつた。身を伏せてみんなと一緒になつていると少なくとも安心感がもてたし、みんなのやり方に逆らおうとするとひどく疲れた。

一人ではなく三人一緒に行動しているのだと思うことは楽だ。然し二人が現状の中で努力して抜け駈けて先ず先頭切つて将校になつて行くのに違いのないことは今迄のつき合いから押しはかることが出来る。学生の時の試験にも二人はそうであつた。試験勉強なんぞおよそくだらん制度だねなどと、小つぶで精悍な毛内が先ずそう言うと、体格のいい沢がびくりとして、そうも言えるけどそんなことを言つていてこつそり人の倍も勉強するんだからなあ君は、などと言つたものだ。そこで二人は声を合わせてアハアハと笑つたものだ。試験の当日には、すつかり準備の出来た二人が、直前になつてあわてている仲間を三角の眼で見ているかと思うと又開始時

刻ぎりぎりまで執拗に情報蒐集に廻つて歩くかしていたものだ。二人は当面の問題に喰い下るだろう。二人がやがて将校の座につくことは明白である。今のつらさは二人にとつては将来の栄光の保証のようなものだ。

巳一はあいまいな顔付きになつている自分を意識した。彼は非難をこめた二人の目付きを知つている。非難というと当を得ないかも知れない。はつきり非難であればむしろよかつたのだが、それはからかいの色あいだ。お前いつでも俺はかかわりがないというような顔付きをしてるじやないかね……。いつも俺だけは別だという……。しかしひとのことじやないんだぜ。お前自身がそうなつて行くんだぜ。まんざらいやでもなさそうじやないか。それとも将校はお嫌いかな。一兵卒であごをつき出す方がご趣味かな。二人は顔をならべて眼をすえて止り木の二羽の鳥のようにぷうつとけば立つて巳一を見る。

いつのまにか、人々も彼等も三八銃を握つていた。銃口がほこりまみれにならないよう気遣つたり又そんな気遣いはいらないんだもう民主主義の世の中になつたんだからと思つたりした。

風はいつのまにか止んでいた。

あの大空でのたけり声もいつ止むともなく聞こえなくなつていた。

ただ三八銃を持たされた人々の不安なざわめきを巳一は感じた。

どんな訓練が待ち構えているかは分らない。まだ何としてもそんなことはまさかなかろうと半信半疑であつた、外国人による訓練ということが、或いは事実なのかも知れないぞという気持に傾いて来た。

然しどうなるのかは知ることが出来ない。未知の領域がいつも立ちはだかり、不安のざわめきが瀰漫している。

俺はもうこんなことは一度経験ずみの筈だ。或る程度までは肉体が堪えられる頃合も分つている筈だ。苦痛を享楽に変えて行くずるさにも免疫のわけだ。巳一はそう思い、然し又そういう考えの種が身体の底に沈澱しているのを外からうかがわれないように固く隠そうと思つた。

毛内も沢も不安に相違ないのだ。だが二人は抜け駈けて行くことに必ず熱中する。やがて一歩先んじたら、二人は巳一に気合をかけることをも躊躇したりはしない。巳一はそこのけじめをはつきり腹にすえて置かなければいけないと思つた。

エスカレーターで運ばれるように人々はそこに近付いて行つた。そことはどこであるかはつきりはしない。ただ学生の時の軍事教練の時間のように、眼をつぶつて銃を握り埋立地や松林の間に身体を伏せたり這い廻つたりしていると（埋立

地の草むらに落ちていたあやしげなもの）二時間の単位時間が経過して解散が出来たのだし、そのまま下宿に帰つて畳の上にひつくり返り眠りこけようとどうしようと気儘であつたように、今度のこともそうなるのだろうとぼんやり考えていた。そのうち解散の号令がかかつて解放されるだろう。

その間も人々の散開匍匐している背景は徐々に移動していたわけだ。道が二股に分れて、その一つは坂を下つて下の方に伸びているのが見えた。銃を持たされた人々は崖の上の方を進んで行つた。空には飛行機が飛んでいるようであつた。おさえつけるような爆音がしていた。太陽のかがやいた午後のおだやかな暑気があたりに満ちていて、博覧会の花火でも上げられているような、だれたのどかな錯覚の気分がただよつていた。崖下の道の方には、道路に沿つて昔風のどつしり黒ずんだ木造の藁屋根の家が二三軒かたまつていて、その家の前では年寄りや女子供が崖の上の道の異様な集団のおかしな行進を見ていた。それは声援を送つているようにも思えたり、又全然無関心に眼の前の見世物を見物しているのだとも見えた。然しそこにははつきりと、行進している人々とは別の、それに参加しなくてもいい状態があつたわけなのに、巳一が列を離れてそこに逃がれて行くことを思いつかなかつたのは不思議という外はない。

彼は崖下の別の人々をみて、ちらつとおやあそこにああしても居られるんだなと思つただけで、その状態と自分の状態を結びつけてすぐさま自分の行動をきめる具体的なきつかけに考えをとどかせることは出来なかつた。それはまるで思つてもみなかつたことだ。そして殆んど同時に自分の行く先に奔湍が近付いて来たことをはつきり本能的な知り方で気がつき、急に自分の所持品に気がかりが起つて来た。そこに行けばきつと検査がある。そして出て来た色々の品物について訊問されるにきまつている。訊問は凡そ答えのしにくいものばかりなのだ。

「君は何だ」「……」

「之は何だ」「……のようなものです」

「なぜここに来たのだ」「……」

「どうしてそこへ行くのだ」「……」

「君は誰だ」「神呪（カンノウ）巳一です」「なにい、カンノウミイチ？」

それは巳一にとつては恐怖だ。

と言つてもその場に立たされてしまえば何でもないことのようには思える。何でもないことではないかも知れず、何かがはつきりして来るようにも思えたが、然しそこに近付いて行く時の恐怖と厭悪と煩瑣におびやかされる気分は消されない。

巳一はポケットをさぐつた。仕種が大きくなり、こつそりやつてのけようと思つているのにうまく行かない。彼はポケ

ットからゴムサックを取り出し、同じポケットに有り合わせた新聞紙片にくるんで片手の掌の中でもみまるめた。がさごそと大きな音がした。巳一は周囲に気がねをした。密告されるかも分らないという不安があつた。巳一は毛内と沢の他の者の素性をまるつきり知らないのだ。毛内も沢もその品物を持つている筈であつた。いや毛内は早く処分しているかも知れない。然し少なくとも沢は持つている筈であつた。巳一はその処置を沢と相談すればよかつた。然し相談すれば周囲にことがあらわになるので、それが巳一にはいやであつた。と言つて自分だけ勝手に処分すれば、沢はひとり取り残されるような結果になるかも知れない。自分ひとりだけで有利な状態を作つて置くことが、沢に対しての裏切行為のように思えて少し拘つた。こういうことはお互いが細心な注意で処分することにならされていなければいけないのだ。彼は沢が愚鈍に見えて来た。沢は毛内や巳一の真似ばかりして来たように思えた。ふだんは毛内の追随者だが、毛内の暗示がない時には沢は巳一のやり方にも何の抵抗も感じないで従うに違いない。巳一はそのような意識にしばられて、少し指先がもつれたが、とにかく新聞紙片をまるめたものを崖下の方に何気ない素振りで投げてやつた。それはうまく行つた。恐らく誰にもそのことが異様なことのようにはうつらなかつたろう。彼が鼻をかんでその紙を捨てた位にしか思わなかつたろう（実は巳一の気持はもう一屈折したうしろめたさを感じていた。というのは、恐らくたとえ対手はそんなものを見つけても一顧も与えないだろう。その対手が一顧もしないようなことに先廻りして気を病み証拠を消すようなことをしているのが、鼠のようにこそこそして感じられ、それが彼をすつきりさせなかつた。だがどうしてもその証拠は湮滅して置かなければならないと思えることも動かせなかつたのだ）

まるめた紙を巳一は崖下に落ちるように投げてやつたのに、うまく下に落ちて行かずにあやうい所に引つかかつてしまつた。

しまつたと反射的に思いはしたが、すぐその後でその方がよかつたのだと思い返した。

そのままほつて置くことだ。むしろその方が作意なく見えていい。却つて下に落ちていれば崖下の傍観者たちがその品物をあやしむに違いない。巳一がそう思つたその時、今度は沢が彼と同じような動作をし始めた。ポケットの中からゴムサックをとり出して紙きれにまるめこみ崖下に投げてやつたのだ。そしてそれはうまく一度で下に落ちて行つた。

沢が又真似をしやがつたと巳一は思つた。と沢はそれだけでなしに崖はしにひつかかつている巳一の分まで落そうとし始めたのだ。沢は短かい棒切れをす早見つけて、その先で紙をつついて下に落そうとかかつた。然しなかなかうまく落ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て行かないのだ。巳一は舌打ちをした。何ておせつかいなことまでしやがるんだ。そんなことをすれば目立つんだ。目立つてはまずいのだ。彼は沢に憤りの眼を向けた。だが沢に何か話しかければその上に目立つことをなぞるようなものなので、忿懣に身内があつくなつたが、じつと押えて沢の動作をいらいら見守つた。

ところが沢はその仕事にひどく熱心だ。全体の見通しとか均衡などは考えもせず、一種の善意と親切心でとうとう目的を達してしまつた。しかし何と言つても周囲に気付かれぬようにしなければならないことであつたので、沢の気持にもあせりがあり、そのためにくるみ込んだ中のものが包み紙からはみ出してしまい、別々になつて崖下に落ちて行つた。

「ちえつ、ぶざまなことだ」と巳一は思つた。「こいつらと事を謀ることは出来やしない」

沢は汗ばんだほつとした顔を巳一に向けた。片えくぼが無邪気げに見えた。然し巳一はにこりともしないで沢の顔をじつと見返していた。(俺はほほえみ返すことが出来ないのだ。これは俺の……かも知れない)

幸いにこのことは摘発されずにすんだ。

然し巳一はそのサックを崖下の傍観者が拾つてわざわざ追いかけて持つて来るような気がしてならなかつた。これ、おじちやんのでしよう? 子供がふうせんゴムのようにぶら下げて持つて来るかもわからないではないか。ほれ見ろ、巳一は沢にそう言うだろうと予想して見るわけだが、又その言葉は自分の体内から発散し切れずに、うつろに反響しながら止まつてしまうようであつた。

巳一は一層孤立した自分を感じた。群衆の塊りというものが、厚みを以つて彼をとらえなかつた。晩夏の海水浴場でのうそ寒ささえ感じた。もつともつと緻密なものでなければならんのではないか。

相変らず行列は前方へ流れていた。そしていよいよ近付いて来たのだという気配が濃くなつて来た。

「駈け出して突つ込むんだ」

それは明らかな号令となつて聞こえて来たのではなかつたが、何かそういうことでなければおさまりがつきかねるようであつた。

すると人々の前に号令者が姿を現わした。

遂に現われたという感じであつた。それは巨大なむくつけきものだ。人々がそれとなく観念して考えていた調練者としての外国人は言つてみればスマートな甘さを含み過ぎていた。そしてそこに現われた外国人というものは凡そ予想したものと違つていた。醜怪なるものであつた。回教徒が想像する大入道の魔神に似ていたといえるかも知れなかつた。ぶよぶよと身体はふくれ、顔なども凸凹していた。

その号令者は五六人の女を連れていた。女たちの方は外国人ではない。それを人々の反対側に場所取らせて対峙させた。女たちは皆ちんちくりんな背丈で恰好悪く太っている。顔の色つやもすぐれず、固いが弾力のある感じだ。身体つきから受けるのは中性的なものである。額の生え際がせま苦しくやわらか味がないのと足が短かくふくらはぎが太いので、肉の塊りの感じが強かったのだ。然し女たちは明らかに同胞であった。

「それっ、女たちにかかって行け」

調教者として現われた巨大な男は叫んだ。その言葉は人々に通じた。然し人々は瞬間ぼんやりしていた。言葉は通じたがそれとはつきり意味がのみ込めなかった。

すると男が又どなった。

「かかれ、かかれ」

女たちの表情に感動は認められなかった。脂肪の塊りが色のさえないブラウスとスカートをまとっているという事態がそこにあった。外国人の眼の中からはどんな感情も読みとれない。ただその命令に従わなければ報復として厄介なことが課せられそうな予感がしただけだ。然し人々は躊躇した。白日の下でそのようなことが起りうるとは考えられないというひるみがあった。人々はざわめいて動揺した。それを見てとると、外国人は巨大な身体をゆすって、女たちの中から一人をつかまえた。

「よろしい。それじゃ私が見本をみせてやる。いやお前たちが肯んじないのなら、私がやるまでのことだ」

女は抱きすくめられた。もがいて逃げようとした。然し男の大きな身体の下では効き目がなかった。男の長いものが露出した。巳一の好奇心はそんな時でさえ正常に働いた。巳一は外国人のそれを見るのは始めてだ。ただ長いだけで、しなやかではあるが力は弱そうに見えた。あれが何の役割をするというのか。犬のつくばいがあるばかりでむしろ悲哀の感じがあった。

いけにえの女は夢中になって逃げようとした。スカートがまくれて太ももがあらわになった。その女は女たちの中でも一段と醜いのではないかと思われた。

男も醜怪な形をして居り、そして又一番醜い女をつかまえたことで巳一の気持は軟化させられ、心のすみにひるみがあった。若し男が美しく女がみにくかったらどんな感情に襲われたろう。又その逆であったらどうだったろう。そして事態が許せたり許せなかったりするはずみを与えるエネルギーが今まさに発生しようとしていた。

しかし仮に女が男の動作にまかせたとしてみたところで、どうだというのだろう。女の男から逃げようとする気持はき

つと折れ曲るだろうし、だから今女が夢中で男から逃げようとしていることが滑稽だと思い始めると、むしろそこに起ることをしてすつかり展開させてもみたかつた。

然し女は顔色を紫に充血させて逃げようとし、男は始末のつかなくなつた厄介な一物を持ちあぐねていた。その男が人々の上に号令者として出て来ていることに人々のこだわりがあつたのだろうか。

「女を逃がしてやれ」

誰かがうしろの方から小さい声で言つた。人々ははつとした。「女を逃がしてやれ」人々はそれに応ずるように身体を左右に動かした。外国人はそれを聞くと、ふとひるんだかと思えたが、反射的に一層ふてぶてしい構えになつた。哀れな感じはふつとかき消え、露骨に挑発的になつた誇張した動作をはつきり示した。

「やめろ、やめろ」

人々はぶつぶつ言つた。巳一は人々の塊りがすけていて隙間だらけなのを感じた。巳一にとつては毛内や沢との結びつきが塊りを理解する差当つての手がかりとなり、それはたよりなく不信に押し流されて行く感じだ。だが毛内と沢は眼を輝かせた。二人は人々の前に出て行つて、「やめろやめろ」とにぎりこぶしを作つた右手を上下に振つて叫んだ。人々はそれに合わせてぶつぶつつぶやいた。

巳一は人々の動向をうかがつて過敏になつている自分をそこに見た。そんなことであいつがやめるものか。俺の現実の認識はそうなんだ。毛内や沢に何が出来るものか。そのくせ巳一はどきどきして胃が浮き、やめろやめろと調子を合わせ、その場も逃げ出せず、事態がどうなつて行くかをつかむ能力も失つていた。

外国人側に誰も応援者がやつて来ないのが不気味であつた。ひよつとすると、気のつかぬ所でこの現場は何かにキャッチされていて、そのうち一斉掃射をされるかも分らぬような気がした。

とかくするうちに人々は身体を左右にゆすりながら外国人を取り巻いてしまつた。それを外国人ははつきり知つた。するとふいにその行為をやめて女を放したのだ。女は脱兎のように人々の間に逃げ込んだ。

「そうか、そんなにやめてくれというのなら、やめてやろう。そらこれでいいだろう」

外国人はそう言つてうそぶいた。

人々は囲みを解いた。ほつとした感情が流れた。あつけなくばらばらになつてしまつて、次の何かの号令がどこからか来るのを待つた。そして前方にぞろぞろ歩き出した。

ところで巳一はほつとすると殆んど同時に、また新たな恐

怖につき落とされている自分を感じた。やみくもに彼は人々の行く逆の方にかけ出した。人々はみんな落着いた顔付きでどんどん歩いて来た。彼は人々とぶつかつた。ぶつかりながら彼は人々の数が思つたより多いのに気がついた。こんなに後から後からつめかけて来ていたのか。それなのにあの時何故あんなに寒々と隙間だらけな感じを持つたのだろう。これは早く何とかしなければならない。一体みんな何をぐずぐずしているのだ。巳一は急にせきたてられた気持になつて、尙も反対の方に走りながら右手をふり上げ、

「団結せよ、団結せよ」と叫んだ。

人々は彼を無視して通り過ぎた。

彼は又叫んだ。「団結せよ、団結せよ、今が大事なのだ、今この瞬間なのだ」

然し人々は薄笑いを浮べたまま、彼にかかわらないで前のままの方向に歩いて行つた。

巳一は自分の叫びがうつろなのを知つた。然しそう叫びながら、どうしてこううしろめたい感じがつきまとうのかと厄介なことに思つた。

……

……

天の覆いが雨雲のように低くたれ下つて来て、世界は狹く暗く灰色に圧縮されて来た。その灰色に暗くなつたたそがれ時を、巳一は浜辺の方に走つて行つた。

一体どうなつているのか分らなかつたが、むしようにせきたてられ、止まることが出来ないように思つた。彼を含めての一切が、予め予定されていて、その軌道の上を行かなければならないことは、誰もが疑いをはさんでいないように思えた。

而も、も早事態は最悪の場に臨み、彼が動員されたのは、態勢挽回の機縁をつくるためにそうなつたのだと理解された。

一度はあのようなことをしようとしていたのだから、巧妙に説得されると、抵抗出来ないでずるずる追いつめられた。然しそうなるまでの経路はも早何の意味もなくなつてしまい、彼はあわてふためいて、その時刻に間に合うために浜辺にかけつけていつた。

ジャーナリズムの先端が彼のその行動に眼を向けているということが巳一をはげました。新聞の第一面にでかでかと書きつけられる。輪郭がぼやけて黒くぼかされた場景写真が新聞に掲載されると、歴史という文字が跳り出た感じで、あの胸をしめつける悲愴な衝動が読者を襲うのだ。公の善悪や正邪や嫌悪の判断を裏切つて、身内にぞくぞくうごめく異様な興奮が、人々にどんな悪い状態の中ででも我慢し忘却し又逆にそれを逆手に利用することをささやき教えるのではないかと思えた。開き直つたようなそんな場所で人々に支持されて

いると思うことは、彼にぞくぞくする手答えを感じさせた。第一面にでかでかと書いてくれることなら、それだけで生命を投げ出してもいい。

沖の方には何も見えなかつた。と言つて今し方走つて来た陸の方にも何も認めることは出来ない。一面にもやのようなガスがかかり、風のために絶えず移動していた。

かけつけた巳一の姿のみが浜辺の砂の上にあつた。P基地、P基地と彼はつぶやいた。人々から隠匿された軍機地帯であつたが、人々が想像しがちのどんな異様な設備もありはしなかつた。

あの時のままだ。

「甲標的㋑兵器」が浜辺に一基打ちあげられていた。これに搭乗して出かけて行くことが予定されていた。

時刻はずれていた。もう他の兵器は発進してしまつた。自分がその時刻に遅れたことは悔やまれながら、皆と一緒に出かけなかつたことで予定された運命の中から脱れることが出来たのではないかという弛緩があつた。まずまず望み薄のことながら、ひよつとすると或いは生き延びられるかも知れないという期待がひよつと頭をもたげたのだ。するとすぐそういう期待を持てたということだけで、も早また自分は予定された運命のあとを追いかけて行こうという気持に引きずり込まれてしまう。彼は㋑兵器に搭乗して、先発した仲間のあとをたつた一人で追いかけようと思つた。これはくだらないことだと彼は思つた。然しそれを中止して後ろを振り向く気持も起きて来なかつた。

ふと背後に人の気配を感じた。そこにはQ司令が肥満した体軀を持ちあつかい兼ねた様子で立つていた。

「やあ神呪中尉、御苦労御苦労。御成功を祈りますよ」

然し二度目の今ではQ司令の姿や言葉は、滑稽な役割さえも果していないように思えた。巳一は司令に軽く人差指を上げて合図しただけで、自分で出かけて行かなくてもいい安堵のために水ぶくれて見える司令の顔を無感動に見過した。

彼は㋑兵器の小さな司令塔の天辺につけられた丸い上蓋を開けて中にはいろうとして、既に操縦席についていた山田兵曹の仰のけてにつこり笑つた顔にぶつかつた。

「おやお前来ていたのか」

神呪巳一はうれしそうに叫んだ。

「お待ちしていましたよ。早くお乗り下さい、艇長」

山田は落着いた声でそう言つた。

巳一はとつさにそのまま山田と二人で乗つて行こうかと思つたのにいつか何かに、(その時は、ぼくは同乗者をほうり出して自分ひとりで行くことに決心していたのだ)と書いたことを忘れなかつた。

「山田、お前降りろ。お前が居たら邪魔になるし、第一ひと

りで事が足りるのにわざわざ二人もくつついて行くのはナンセンスだよ」

巳一はそう言つた。すると山田兵曹はにやりと笑つた。

「艇長、いや神呪さん、いいですよ。そんな気兼ねはいいじゃないか。この七年間というもの季節季節にあなたに見舞状を出していたことをお忘れかな」

山田は少しにくにくしげな言い方をした。巳一は黙つた。何か言おうとしたが言葉にならなかつた。然し同乗者がいることは我慢がならんような気がした。

巳一は黙つたまま蓋をしめた。

外界からは完全に遮断された。

そして蓋を外部からボルトで締めつける音がうつろにひびいて来た。彼と山田は狭い㊀兵器の操縦室に封じ込められたのだ。お互いの声さえ妙に遠い感じで、もうどうにも外界に連絡しようのない、何ともへんちくりんな抽象的な世界がそこにあつた。どんな悪いことをしても又考えてもいいような気がした。もう外には出られないのだ。ただ出所不明の至上命令が二人の頭上にかぶさり、その為にその遂行に殊勝にも気持がはやつて來るのがあわれであつた。死に急ぎを始めているのだ。もうどこでもいい、早くそこに行つてぶつかつてやり度いと思つた。

巳一は山田を手で押しのけて操縦席に坐つた。操縦だけは自分でやろうと思つたからだ。手で押しのけた時、掌に山田のぬくい体温を感じ、山田にもつとはずみのついたうそでもいきのいい言葉をかけてやればよかつたと思つた。

巳一は機関を発動させようと思つた。早く早くとせきたてる声があつた。何が早くか分らなかつたし、一体何処に行くのかも分らなかつた。ただ早く早く……。

然し彼は全く操縦操作を忘れてしまつていることに気がついた。どれがどうでどこをどうするのだつたかこんぐらかつた。電路の接や断がどんなであつたか、何かややこしい手順のあつたことだけが記憶に残つていた。

巳一はその時始めてのように絶望感に襲われた。

自殺行為へ発動しようという矢先になつてその使用法が分らなくなつたということで始めて絶望に襲われたのだ。もつと前にいくらも絶望しなければならなかつたろうに。

然しもう蓋はしめつけられ、新聞の眼がこの行為を見送つているらしいことは、どうにもならないことのように巳一の気持にかぶさつていた。

彼は勝手やたらにスイッチやボタンやクラッチを引つぱつたり押し上げたりしてみた。

と一寸した拍子に軽くエンジンがかかつた。

とたんにはつきり昔覚えていた操作手順がよみがえつて来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.